

FOCUS

日本の
医療現場



札幌市西区の「泌尿器科かかりつけ病院」 前立腺がん陽子線治療で豊富な治療実績

中田 康信 先生(左) 医療法人社団康仁会 中田泌尿器科病院 名誉院長
宮島 直人 先生(右) 医療法人社団康仁会 中田泌尿器科病院 院長

(北海道札幌市)

医療法人社団康仁会 中田泌尿器科病院は、最新の技術や機器を駆使して専門性の高い治療を迅速に提供しています。尿路感染症など高齢者介護施設からの紹介も積極的に受け入れ、「泌尿器科かかりつけ病院」としての役割を担っています。地域の基幹病院との連携を通じて前立腺がんの陽子線治療にも参加し、同治療の普及に努めています。

施設概要



所在地/北海道札幌市
病床数/28床
診療科目/泌尿器科
開業年/1986年

POINT

- 最新技術や機器を駆使して尿路結石や前立腺肥大症などの治療を迅速に提供している。
- 「泌尿器科かかりつけ病院」として、超高齢者を含めさまざまな症例を受け入れている。
- 前立腺がんに対して、地域の基幹病院との連携で陽子線治療を推進している。

「泌尿器科かかりつけ病院」を掲げ 多様な治療ニーズに幅広く応える

高齢化を見据えて単科の専門病院を開設

医療法人社団康仁会 中田泌尿器科病院は、名誉院長の中田康信先生が1986年に開設し、2026年で40年目を迎えた泌尿器科単科の専門病院です。「高齢社会に向けて泌尿器疾患治療の需要が高まると想定し、また専門医として地域医療に貢献したいと考え、『泌尿器科かかりつけ病院』を掲げて立ち上げました」と振り返ります。

開設当初は泌尿器がん全般の手術から、排尿障害や尿路結石などの良性疾患まで、“できることは全て行う”ことを診療および病院経営の信条とし、地域の泌尿器科ニーズに幅広く応えてきました。経営戦略としては、内視鏡を用いた経尿道的膀胱腫瘍切除術(TUR-BT)や尿路結石、前立腺肥大症などの手術に特化し、年間の手術件数は1,000件を超えています。

2023年2月から院長を務める宮島直人先生は、「28床と小規模ながら、手術経験の豊富な泌尿器科専門医をそろえて

おり、尿路結石や前立腺肥大症の手術では技術や機器を常にアップデートして、スピーディーな治療を心掛けています」と話します。

痛みや苦しみを一刻も早く取り除くことに注力

尿路結石では体外衝撃波結石破碎術(ESWL)、経尿道的



「専門医療の提供のみならず、患者さんのQOLを考えた治療の実践を心掛けています」と中田先生は語ります。

結石破碎術(TUL)、前立腺肥大症では最新のツリウムレーザーによる前立腺レーザー蒸散術を導入し、痛みや出血の少ない治療を追求しています。

そして、特筆すべきは診断から治療や手術を実施するまでの早さです。「特に尿路結石は、診断が付けば即日での入院・治療が可能です。専門性を持ちながら小規模で小回りが利くという当院の特性を生かし、開院時から患者さんの痛みや苦しみを一刻も早く取り除くことに注力してきました」と中田先生は強調します。専門性に裏付けられた診療実績に加え、このように長年貫かれてきた同院の診療姿勢が地域から高く評価され、立地する札幌市西区を中心に市全域の医療機関から患者さんが紹介されるといいます。

超高齢社会を背景に、高齢者介護施設からの紹介や緊急搬送も増えていますが、どのような症例も受け入れる方針で対応しています。「80歳、90歳でも手術で尿路結石を取り除いて施設に戻っていただくなど適切に治療を行ってきた積み重ねがありますから、病院や施設も継続して患者さんを送ってくれます」と中田先生は話します。

このほかにも30年以上、週2回の夜間外来診療を続けており、文字通り「泌尿器科かかりつけ病院」としての役割を担い続けています。

地域の放射線治療センターと連携し 合併症の少ない陽子線治療を推進

治療前後の処置や薬物療法を担う

札幌市には陽子線治療を行える施設が3カ所あり、市内の病院が運営する札幌高機能放射線治療センター(SAFRA)もその一つです。中田泌尿器科病院は数年前から同センターと連携し、前立腺がんの陽子線治療を積極的に進めています。

陽子線治療の根治性は手術と同等とされ、周辺臓器への影響を抑え患部に集中的に照射できるため、従来の放射線治療に比べて短期間で施行でき、また副作用が少ないというメリットがあるとされています。起こりうる副作用には膀胱や直腸の炎症症状が挙げられますが、陽子線治療前に金マーカー留置術とスパーサー留置術を行うことで軽減することが可能です。同院ではこれらの留置術を施すほか、治療前後の薬物療法などを担っています。

宮島先生は、「前立腺がんへのロボット支援手術は、導入する医療機関数の増加に加え、泌尿器科内で治療が完結することもあって急速に普及していますが、尿失禁や勃起不全など術後の合併症で悩みを抱える方も少なくありません。当院ではより侵襲性の少ない陽子線治療を推進し、患者さんのQOLを維持したいという思いで取り組んでいます」と

話します。陽子線治療は入院を必要としないほか、放射線治療センターでは、通常6週間かかる治療を1回当たりの線量を増やすことで3週間に短縮しており、通院負担を軽減できるのも強みです。

連携の相乗効果で治療実績数も増加

陽子線治療における連携の主な方法としては、同院で前立腺がんと確定診断された患者さんに対して、金マーカー留置術などを行った後、放射線治療センターに送り、治療後も同院でフォローアップを行う場合や、苫小牧市や旭川市など広域から同センターに紹介された患者さんに対して同院で金マーカー留置術を実施し、同センターでの治療後は地元でフォローアップする場合などがあります。

宮島先生は「現在、陽子線治療の実績は年間50例を超えますが、当院からの症例と全道各地の病院からの紹介はそれぞれ半数程度です。連携を始めた頃は10例程度でしたが、当院からの紹介が増えたことによる相乗効果かもしれません。同センターへ直接紹介されるケースも増えていきます」と話します。泌尿器科医が集まる講演会や勉強会などで陽子線治療のメリットなどを積極的に発信しており、同治療への周知が広がりつつあることを実感しているといえます。

これからの展望について中田先生は、「当初の想定通り超高齢社会を迎え、泌尿器疾患で悩まれる方が増えていますので、これまで通り多様な泌尿器科ニーズに応え続け、地域からの信頼を積み重ねていきたいと思えます」と力を込めて語られます。宮島先生も、「ほかの病院で受け入れを躊躇するような症例を受け入れて、地域に貢献できればと考えています」と抱負を述べられます。今後も「泌尿器科かかりつけ病院」としての役割を果たしながら、地域の泌尿器科医療を牽引していく姿勢を両先生は貫かれます。



宮島先生は、中田先生と二人三脚で陽子線治療をはじめとする合併症の少ない治療の普及に注力しています。